行為に現れた日本人の仏教信仰

伊藤　喬

はじめに

仏教が日本に伝来して以来千数百年の間、仏教は日本文化の上に輝かしい足跡を残して来た。このことは今さら云々するまでもない歴史上の事実であつて、日本文化は絶えず仏教と表裏一体に進んで来た。その伝統の力は現代に於てもなお、仏教を日本の社会と強力に結びつかしめており、また種々の仏教行事や儀礼は日本人をして仏教と無縁では生活出来なくせしめている。

あちこちの寺院や施設で催される仏教行事に多くの人々が参加する事実、またそれらの寺院・施設が立派に維持されている事実 ― それらはいずれも仏教が現

に立派に行われていることを示すものに他ならない。たしかに仏教は行われている。だがその行われ方が問題だ。それは「日本仏教」とカッコをつけて固有名詞として呼ばれて決して不思議とするに当らないほど日本的であり、他の仏教国の仏教とその形態を異にする。

筆者は先に、そうした日本仏教の特異性を特に信仰形態の面から宗教社会学的に分析して「信仰形態から見た現代日本仏教の一側面」と題する卒業論文をまとめた。しかしこゝでは紙数も限られており、その全てを述べることが出来ないので人々の信仰生活の内、行為に現われたもののみについて記することにしたい。

なお、本稿に用いた調査資料なかんずく筆者の行つた調査については説明を要するが、紙数の都合で省略する。

1 礼拝行動

仏教的行動には種々のものがあるが、それらの行動の中で最も普遍的と考えられる礼拝行動について先ずみてみよう。この礼拝行動の中には、仏壇、寺院、墓等に対する礼拝が含まれる。

〔仏壇〕仏壇は神棚と共に日本の殆んどの家庭に常置されている①。そして人々がそれをおがむ場合は次の如くである。

a 毎日おがむ 63%
b 毎月の決つた日 17%
c 年中行事的な日 31%
（高木調査）②

a 毎日おがむ 57%
b 毎月の決つた日 12%
c 年中行事的な日 26%
d 全然おがまない 5%
（伊藤調査）

これは全体的な数字であるが、観点を変えて年令別、性別による数字を見てみよう。

（年令別）

	a 毎日おがむ	b 毎月の決つた日	c 年中行事的な日	d 全然おがまない
20代	23%	20%	30%	27%
30代	32%	18%	32%	18%
40代	53%	16%	27%	4%
50代	68%	16%	13%	3%
60代以上	74%	14%	10%	2%

（性別）

	男	女
a 毎日おがむ	43%	69%
b 毎月の決つた日	21%	8%
c 年中行事的な日	28%	20%
d 全然おがまない	8%	3%

（いずれも伊藤調査）

以上の数字によつて仏壇に対する礼拝行動がどのようになされているかゞわかる。全体的にみても仏壇へは毎日まいる人が多く、毎日拝まない人でも毎月の決つた日（命日）とか年中行事的な日（年忌・盆等）には拝んでおり、全然拝まない人は少ない。年令的には年少者より高令者の方に毎日拝む人が多いのは首肯される所であるが、性別で男性よりも女性に毎日拝む人が多いのは、主婦にそう答えるものが多くそれが女性全体の数字をかように大ならしめているのである。日本の家庭では、仏壇や神棚へおそなえものをするのは殆んど主婦で③、彼女達はおそなえをするのを拝むということと混同しているのである。尤もおそなえしたついでに拝むということは考えられる。

〔寺〕次は寺に対する礼拝である。

寺に対する礼拝は寺壇関係によつて生ずる壇那寺④への礼拝と特別な効験を目的になされるか或いは観光の目的でなされる壇那寺以外の有名寺院⑤への礼拝とに大きく分けることが出来る。

壇那寺は寺壇関係によつて「家」と結びついているのであつて、個人と壇那寺との結びつきは決してかたいものではない。

先ず数字をあげてみよう。

a 毎日まいる	0
b 毎月の決つた日	8%
c 年中行事的な日	44%
d 全然まいらない	30%

（伊藤調査）

○ 全然まいらないもの 20%

（高木調査）

一応数字的にはかなりの人が壇那寺に参詣するようであるが「何故まいるのか」という質問に対して「墓にまいるついでに」と答える人が多く、壇那寺は墓とワン・セットであることによつてその存在価値を認めら

れているのが現状である。墓が共同墓地という寺を素通りした形になりつつある今日、壇那寺は次第に忘れられた存在になるのではないか。それは何故か。先にも述べた如く壇那寺はもともと先祖の墓を主な媒介として家と結びついたものであつた。人々は壇那寺を自から選びとつたわけではない。その家に生れたということは、即ちその家の壇那寺に属するということである。つまり壇家制度という、制度による結びつきであつて、そこには何ら血が通つていない。壇那寺というものがもともとそのようなものであつた上に、それを結びつける最大の媒介者である墓が寺を素通りするなら、その関係がどうなるかは自明のことである。このことはまた、教団加入とも関係してくる。普通、教団に参加するという行為は積極的な信仰の末なされるのであるが、仏教に於ては最初から教団加入ということはあり得ない。たまたま自分の生れた家の属する壇那寺が浄土宗の寺であれば、その人は浄土宗の信者ということになる⑥。つまり壇家制度は、仏教々団を支える上には極めて有効な制度であるが、その反面仏教と個人との結びつきを著しく阻害している。

それに対して何らかの御利益を求めてなされる礼拝や物見遊山。観光の目的でなされるものは極めて盛んである。観光の為になされるものはこゝでは関係がないのでふれないことにするが、御利益― ことに現世の― を求めてなされるものをも含めて信仰的になされるものについて考えてみたい。

観音信仰とか薬師信仰とか一見それは仏教の固有信仰の如く考えられるが、これらは決して仏教固有の信仰に淵源を発するのでなく俗信（或いは迷信に近いものもある）や民間信仰との習合の結果であつて、それらを拝む代償として人々は現世の御利益をこうむろうとするのである。従つて人々の信仰の対象たる観音や不動は人々の欲望の種類に応じて分業的に業務分担されて存在する。その間の事情を三枝博音氏は次のように述べている。

『（崇拝の対象として）私達は不動、大黒、荒神、閻魔、地蔵、薬師、稲荷、観音などを先ずあげることが出来る。これらを対象とする信仰には、日本人の知性の未発達、技術の幼稚さの補いとなる要素が沢山混入している。したがつて、仏教および仏教の

附随文化から出て来たこれらの名称は、じつにさまざまの規定語を冠せられるのである。たとえば薬師には、水薬師、蛸薬師、瘡薬師、懐妊薬師、その他いくつもある。明神にも七つも八つも種類があり、稲荷の種類は十いくつもあり、地蔵にいたつては八十いくつが数えられる。庶民の欲望の種類だけ如来や観音が出てくるのである。⑦』

〔墓〕次は墓に対する礼拝行動である。

例によつて数字を先ずあげよう。

a	毎日まいる	0
b	毎月の決つた日	15 %
c	年中行事的な日	75 %
d	全然まいらない	10 %

毎日まいるものはさすがになく大部分が年中行事的な日にまいつている。その年中行事的な日というのは主に盆、彼岸、年忌等であつてそれらの中では「盆と答えるものが圧倒的に多い」（高木きよ子氏）。又高木宏夫氏によると「墓は一年に一度はおまいりすべきものという考え方が支配的」である。

つまり墓は年令、性別に関係なく殆んどの人が年に一度（盆）先祖にあいさつに行くというのが最も普通の形である。この墓参という行為はことさら仏教に固有な行為ではなくあらゆる宗教いな無宗教の人々に於てもなされる行為であるが、日本に於ては古来より墓と仏教とは人々の意識に深く結びついており、その限りに於ては極めて仏教的な行為といわねばならない。

2　積極的行為

仏教的な対象に対する礼拝行動は、かようにかなり一般的に行われているが、しかしこのことだけを以つて日本人の仏教信仰が積極的であると断ずるのは早計に過ぎる。何となれば、人々のかかる行動を支えるものは個人の信仰よりも、むしろ習慣の要素が多分に含まれているからである。

そこで次にそうした習慣の要素よりは、もう少し積極的な意識によつて可能である行為についてみることにしよう。そのような行為として行（修行）、説教聴聞、仏教書（経文等を含む）を読むことなどがある。

〔説教〕先ず説教について

一度でも説教を聞いたことのある人と全然聞いたこ

とのない人との割合は次のようである。

a　聞いたことがある　48%

b　聞いたことがない　52%

両者はほぼ同数であるが、聞いたことのない人がわずかながら上まわつている。

これをさらに年令別、性別にみてみると

（年令別）

	20代	30代	40代	50代	60代
a　聞いたことがある	7%	12%	59%	73%	89%
b　聞いたことがない	93%	88%	41%	27%	11%

（性別）

	男	女
a　聞いたことがある	32%	62%
b　聞いたことがない	68%	38%

（以上いずれも伊藤調査）

「聞いたことがある」のは高令者に圧倒的に多く、年令が下るほど少くなり二十才代に至つてはほんのわずかである。さらに高校生で説教を聞いた者はわずか4%にすぎないと西光氏[8]は報告している。性別では女性に聞いた者が多く、しかも五十代、六十代以上の女性に多いのは一つの社会現象として注目すべき事実である。

〔本〕これがしかし仏教に関する本を読んだ者ということになると経験者の比率はぐんと少さくなつてくる。

a　読んだことがある　9%

b　読んだことがない　91%

こゝでは学歴の高い者がその支持者であるが、これは必ずしも信仰の為とはいえず、教養の為に読んでおくというのも見られる。

〔行。修行〕「求道の目的で行。修行を行つたことがあるか」という質問に対して「ある」と答えた者は極めて少く、「ある」と答えた者も必らずしも求道の為に行つたとは限らない[9]から、宗教的な意味でなされるこの行為は極めて少ないのではないかと思われる。

〔儀礼〕仏教的な行動として最後に行事、儀式についてみてみよう。この儀礼も二つに分けることが出来る。主として寺院がこれを主催する場合と個人II家が儀礼執行者としての僧を介して行う場合とである。そして後者つまり家が主催する儀礼は葬式に始まつて中陰、命日、年忌等人間の死に関するもの及び祖先の供養が主であつて[10]、こゝでも仏教と祖先崇拝の根強い習合がみられる。一方、寺院が行う行事は、宗派によつてか

なり異なるが普通仏教的な行事―盆、彼岸等はそれだけ人々の参加も多く、風俗・習慣として社会の中にとけ込んでいる場合が多い。

「おわりに」

以上、一々の行動に即して仏教信仰の特にその行為についてみて来たわけであるが、最後にこれを一通りまとめておこう。

人々の仏教的行動を支えるものは大部分「習慣」であつて、従つてその対象が身近かにあり（仏壇の如く）、行為が簡単で、しかも社会的にも習慣化しているものは比較的一般的に行われているのに反し、その行為の遂行に当つて或る種の努力や面倒を伴う行為はあまり行われない。又本来仏教的な行為であるにもかゝわらず他の目的に利用する為になされるものや、行為それ自体が目的とされるものもある。そしてそれらの行為全体を通じて一般的にいえることは（勿論例外はある）、仏教的行為に対して積極的なのは、年少者よりも高令者、男性よりも女性、都会人よりも地方人であるということである。そしてそれらの人々は宗教的な面のみに限らず他のあらゆる生活に於て、慣習維持に積極的な人々であることは社会学者の一致した意見である。

註①筆者が行つた調査では仏壇がある家庭は78％、神棚のある家庭は77％となつており、西光氏の行つた調査（註⑧参照）では仏壇79％、神棚72％となつている。

②高木氏の行つた調査の意。高木宏夫氏は東京大学東洋文化研究所助手で、本調査は『現代宗教講座』第五巻所収の同氏の論文「日本人の宗教生活の実体」より転載。以下本文中、高木調査とあるのはその意で、伊藤調査とあるのは筆者（伊藤）の行つた調査という意味である。

③高木きよ子氏著「村の女性の宗教意識」

④各家庭が何らかの宗教施設・団体と宗教的関係（寺壇関係など）を結んでいる割合は次の通りである。

仏教系	76％
宗派神道	2.6％
新興宗教	1.3％
その他	2％

（伊藤調査）

仏教系	85%
キリスト教	4.3%
天理教	1.3%
神道	2.2%
その他	1.2%

（同志社大学宗教部調査）

即ち日本の家庭では仏教寺院と寺壇関係にあるものが圧倒的に多く、又これとは別に全ての家庭が氏神に属しているから、日本の家庭の大部分が氏神と仏教寺院に所属していることになる。

⑤ 何々不動とか何々薬師といわれるもの、又は大本山。御廟所及び歴史的いわれのある寺院等がこれに当たる。

⑥ たとえば「あなたは或る特定の宗教を信仰していますか」という質問に対して、家の宗教をそのまま自分の信ずる宗教と答える人が多い。

⑦ 三枝博音編『宗教と科学の歴史』所収三枝博音「日本民族の宗教的側面と科学的側面」

⑧ 西光義敞氏、京都平安高校教諭。昨年六月、同氏が中外日報紙に「十代の宗教心」と題して高校生の宗教心の調査結果を発表されたものによる。

⑨ ルース。ベネディクトは「菊と刀」の中で日本人の宗教的修行は、むしろ精神修養としての要素の方が多いと述べている。

⑩ 命日や年忌等の法事は、死者。先祖の供養ということの他に、その機会を利用して平素疎遠になっている親族間の結合を強化するという社会的な役割をも果している。